

川下の風景⑪

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【知る】

なってみないと分からないことは沢山ある。それが苦痛を伴うものであれば尚更ならない方が良く、生物である以上、加齢と共に様々な変化に対応しなければならない。

コロナ禍 3 年目にして初めて“感染者”となった。40℃に迫る高熱が 3 日ほど続き、解熱剤を飲んで寝るの繰り返し。熱が落ち着く頃には猛烈な喉の痛みに襲われ、水を飲むこともままならない。何とか仕事に復帰しても、一か月咳き込む状況が続いた。病気のきっかけとは面白いもので、弱った身体はあちこちに不具合をもたらす。歯の痛みに襲われ、眼の不調に苛まれ、拳句に尿路結石症で人生初の救急搬送される身になった。仕事柄、救急車を呼んで送り出すことは多々あったが、自身が救急患者となってストレッチャーに乗り込むという経験は今まで無かった。屈強な救急隊 3 名に担がれ車内で真っ白な天井を見上げると、何となく死の覚悟と生への執着を思った。尿路結石ぐらいで大袈裟な、と思われるだろうが、こういうことはなってみないと分からない。

当事者になるということは、その事実を“知っている”という視方だろう。大いに売れたという『バカの壁』で養老孟司さんが“知るということ”で語っていたが、その通りだと思った。しかし、知っていることが増えるのは視点の多様性に繋がるが、そこには喜びだけでなく苦悩も含まれる。まさか、と思うことが世の中の常なのだ。

【まさかの人生】

古くなった愛犬の写真をじっと眺めながら、妻は電池が切れたように静止して動かない。愛犬を飼っていたのは、20 年も前になる。今の彼女は、あれほど可愛がった愛犬の姿を認知しているのかどうかすらわからない。しかし、言葉に出来ないだけで、じっと写真に向き合いながら記憶との辻褄を合わせているようにも思える。本当にどこかでその写真を取り上げなければ、2 時間でも 3 時間でもそのままの状態ですてしまう。

認知症症状が現れたのは 4 年程前だった。そういう歳でもあるから、知人が病気になったとか、テレビでそういう話題が取り上げられると他人事でなくなっていた。昔から陽気で、よく笑って、本当に太陽のような彼女も、「私が認知症になったら、子どもたちにも負担になるから

施設に預けてね」と半ば本気で話していた。実際はそう簡単に決められるものではない。物忘れ、被害妄想、やがて夫である私の存在を忘れ、あれほど得意だった料理を作ることも、お茶一杯を淹れることすらできなくなった。

まさか、こんなことになるとは思わなかった。認知症患者 700 万人時代とテレビで言っていたが、まさか妻がそうなるとは思わなかったし、家事もしたことのない私が妻の介護をすることになるとは。こうやって妻の横顔を見ていると、夢だろうと思いたい衝動に駆られる。もしくは、奇跡が起こって妻が劇的に回復するんじゃないか、と淡い期待を抱いている。それがあり得ないことだということは、私がよくわかっている。やがて妻はウトウトと居眠りを始める。ここで寝てしまったら夜に眠れなくなって部屋を滅茶苦茶にしてしまう。起きろよ、さあ、

今日は暑いから部屋の中を散歩しよう。そして、二人が好きな紅茶を淹れよう。昨日、君が好きなクッキーを焼いたからそれを食べよう。頼むから眠らないで。

【人生の再構成】

妻にはずっと迷惑を掛けてきたと思ってるんです。私は仕事、仕事で、家のことは妻に任せっきり。子育てや、学校や地域行事、家事一切にかかるまで。そういう世代だった、と言えばそれまででしょうが、二人でろくに旅行にも行けなかったんです。あそこに古い犬の写真があるでしょう。20年ぐらい前かな、犬を飼っていたのは。子どもの頃からの夢だったらしいです、犬を飼うのがね。だから、一番よく懐いてましたよ。ほとんど家にいなかった私には全然でしたけど。

老後はね、大いに恩返ししてやろうと思ってたんです。旅行にも連れて行ってやろう。掃除、洗濯、たまには料理も作ってあげよう。何様だと言われるかも知れませんが、私に出来ることはそれぐらいしか思い付かないんです。そう思っていた矢先に認知症になってしまって、今では私のことも覚えてはいないでしょう。どうぞ、もしよかったらそのお菓子食べてみて下さい。クッキーはね、昔から妻の得意分野なんです。 Pound ケーキなんかもよく作ってたけど、このクッキーが一番おいしかったなあ。お口に合いますか。それは良かった。妻が作ってくれたお菓子の見様見真似ですよ。1年ぐらい前から始めたんです。妻の介護を始めたころはそんな余裕もなかったですからね。食器棚の中をのぞくと、たくさんお菓子作りの道具が出てきましてね、それを引っ張り出して始めてみたんですよ。最初は食べられたもんじゃなかったなあ。なあ、そうだろ。固くって、甘さも足りなくて、

まるで煎餅みたいでね。それから試行錯誤で練習して、今はこれぐらいは作れるようになりました。

クッキーはね、妻の前で作るんです。生地から作って、型を取って、オーブンで焼く。たったこれだけなんですけど、ひょっとしたら、妻が「それは違うよ」と言ってくれるかも知れない。クッキーが焼きあがったら「お茶を淹れようか」と台所に立ってくれるかも知れない。そう思うんです。奇跡かも知れないけれど、何かの拍子にそういうことがあるかも知れない。

いつまで私に妻の介護ができるんだろう、と最近は思います。4年は長いですね。短いような、長いような。こういう老後が来るとは思わなかったなあ。孫はまだ小さいんで、もっと孫と遊んでやる、そんな人生を思い描いてたかなあ。妻もそう思ってるんじゃないでしょうか。

お父さんが倒れたら、お母さんの面倒を見る人がいないからって、子どもは残酷なもんです。でも、私が子どもの立場なら、やはり同じように親に言うかな。私だってそうやって生きてきましたからね。

こう言うのはなんですけど、赤の他人にこうやっていろいろお話するのは初めてです。子どもたちには言えませんしね。4年間、妻に恩返しする意味でも、少しでも良くなって欲しいという気持ちも込めて、一生懸命やってきました。好きだった山歩きや、昔の同僚と飲みに行くこともなくなりました。もっとこうしておけばよかった、という後悔は数えればきりが無い。なんていうか、少し疲れたんです。夜、眠れないことも、返事のない妻に話しかけることも、ずっとクッキーを焼き続けることも。だから、介護サービスにお願いしようと思います。

2023.8.25 米津達也